

冷たい水

さとうはな

あの日の海

北風にコートの様を立てて

ポケットの中、手をつないだ

あの海に

もう一度連れて行って



フタリノナツ

ふたつに割ったアイスキャンディーの片方。

ふいに頭に乗せられた、ひとまわり大きい麦わらぼうし。

くつのはつま先がぬれるギリギリを歩いた波打ち際。

あなたと過ごした夏は 一生忘れない。



冬の散歩

相変わらずあなたは
冗談を言って からかっては、
おどろくわたしを見て
自分は、あははなんてわらったりする。

あなたの自分勝手なところも
意外と冷たいところも、

知っているつもり。

でもこの繋いだ手を 離すことができなかったんだ。

二人並んですわった防波堤。

あなたは海を眺めていたけれど

わたしが見ていたのは 海なんかじゃなかった。



ひこうき雲

どこまでも抜けるような青空

ソーダ水の泡が 溶けていく

さっきがかったひこうき雲は淡くうすれていった。

あなたは外国の言葉で書かれた難しい本に夢中。

じゃまをしてやりたくて、

鼻歌を歌ってみたけれど、

あなたは私のほうをちらりと見て、

すこしわらってみせただけ。

ひとりでも

ひとりでも、平気だった。

ちよっとピンボケした写真も、

水曜日の電話も、

なくたってよかった。

あなたに会うまでは。



風の丘

わたしたちは手をつないで丘をのぼった。

風が強くて

広場の風車はぐるぐる回っていた。

明日は月曜だから、早起きしなくちゃだとか

もうすっかり夏みたいだとか

他愛のない話をして、歩いた。

飛ぶように流れていく雲に

未来なんて永遠に來なくていいと思った。



彗星のしっぽ

もう、考えるのはよそう。
心が 苦しくなるだけ。

ただ、あの強くかがやく光に、
彗星のしっぽに、
触れることができたことを
幸せに思っていよう。

宇宙の逆側のはしっこで
わたしは 光らなくてもいいから
静かに たたずんでいよう。



臆病な恋

臆病になってしまった恋だった。

あなたに届かない場所で、一〇〇〇個くらい恋の詩を書いた。

一〇〇〇〇個くらい愛の歌を歌った。

すべてを振り捨てて

あなたのドアをノックできたら、未来は変わっていたのだろうか。

冷たい水

今日の帰り道、空を眺めていたら、ふと思いが当たった。
私は、あの人に言葉をかけてもらうのが、すごく楽しみだったってこと。

あの人の言葉は、
ふらついていなかった。
ぐらついていなかった。
いつも私の心の奥に、まっすぐに届いた。

あの人の言葉を聞くと、
冷たくて澄んだ水に、手のひらをひたしているような気がした。

今は距離が離れてしまっただけ、
前のように気軽に話すことはなくなっちゃったけど、
それでもあの、澄んだ水に触れる感じは、ずっと覚えている。

ホワイトライ

今日、ひとつだけ嘘をついた。

傘を、忘れてきたって。

朝から降っていただろって、あきれたように言われて、

かばんの中に小さくたたんだ傘が ばれやしないかって

すこしだけ ときどきした。

肩が触れそうな距離で歩いたのは 今日がはじめて。

それから、

雨降りの街路樹が こんなに明るく見えるって知ったのも、

今日が はじめて。





行き先を失ったわたしたちは、宇宙をたゆたう難破船のようね。

いっそ好きだと言いつづけることができれば、楽になるのに。

12時の鐘が鳴る前にさっらいに来て。

寝間着のまま、はだしのまま、ベランダから連れ出して。

夜の海をふたりで見て、すこしこわいねなんて、肩を寄せ合っていていよう。





観覧車の灯りがひとつひとつ消えていくのを手をつないで眺めた。

この恋の先にあるものが何なのかが、今はまだよく分からない。

だけど、好きという気持ちをずっと大切にしていよう。

たとえば数年後、別々の場所にいたとしても、あの頃は楽しかったなって思い出せる、
そんなふたりでいよう。

雨が降ると、いつも不機嫌になるね。

煙草のけむりと混じったため息に気付いてしまおうから、
わたしも黙りがちになる。

ねえ早くわたしの前髪をくしゃくしゃやってして

『なに拗ねてんだよ』って 笑ってよ。



海へ行っようよ


次の日曜が晴れたら君を迎えに行くよ。

借り物のリムジンで、お気に入りのロックをガンガンかけて、周り中の車にねずみ花火を投げつけよう。
高速を二百キロで飛ばして鎌倉の海に行っよう。

少し前までマジメって言われてた僕も、君に会ってから、ジェットコースターみたいな生き方に慣れてきた。
君がしたいなら、ハコ乗りだってしたっていい。

夕日が落ちるころ海に着いたら、急にマジメな顔になって、それから静かにキスをしよう。

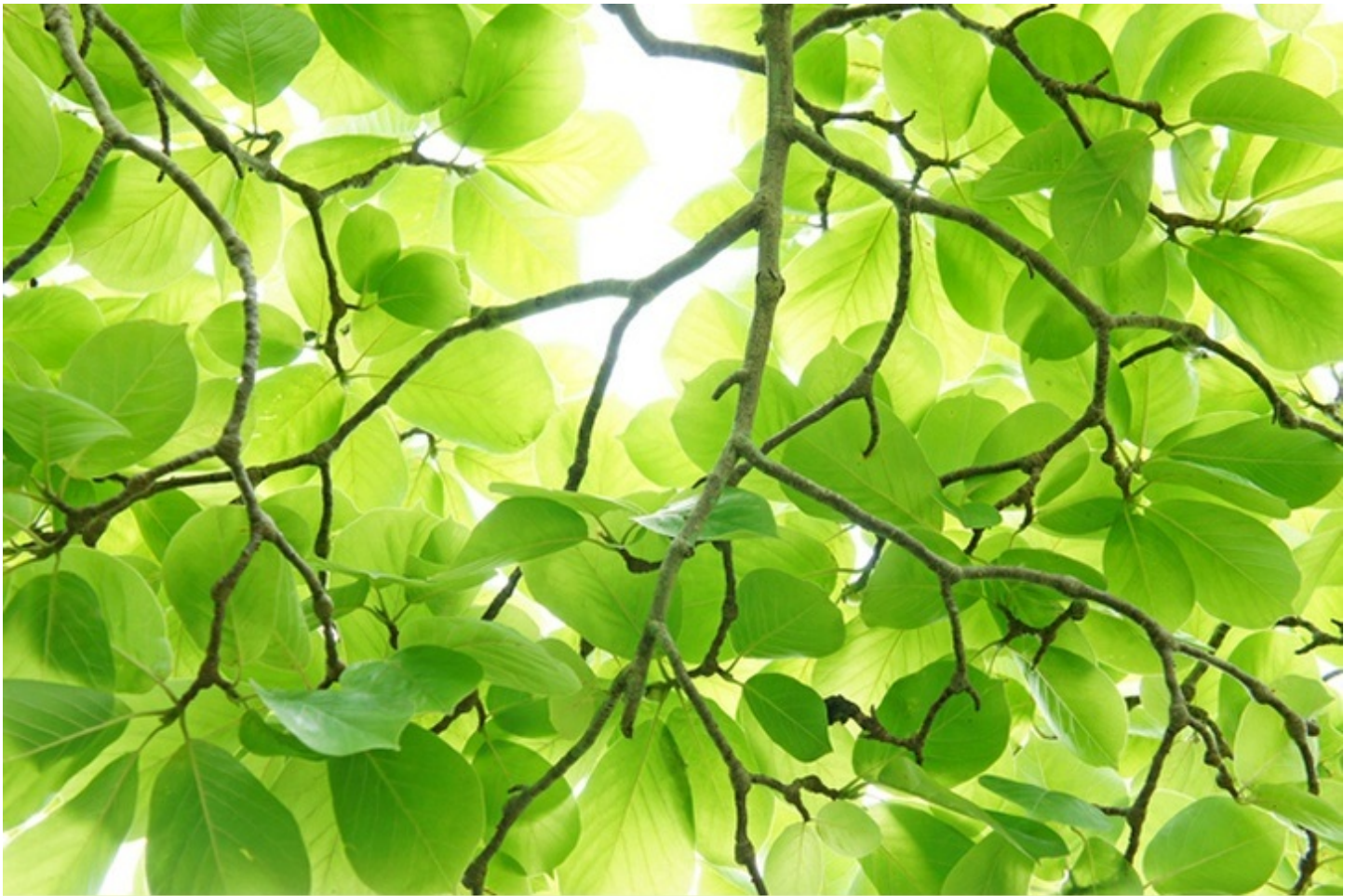




あこがれていた人にほめられて、すごくうれしかった。

空をめざして咲く花のようにわたしもぐんぐん伸びていけると思った。

あの人はきっとわたしをほめたことなんて、明日にはきっと忘れてしまっけれど、わたしは一生忘れないと思った。



その他大勢のなかの一人、ってことは知ってるよ。
でも誰よりも、一番大好きなの。
だから百年に一ぺんくらいでいいから、
わがままを聞いて。

ずっとずっと片思いで

想いを伝えたときも『ありがとね』って

髪をなでられたただけだったから

この恋は 清らかなままいられた

ほんの一瞬だけ抱きしめてもらえた

あの一瞬がこれからの一生の思い出



ずっとずっと聞き分けのよいわたしでいたから、次に会うときにはわがままも言うし、
すぐくすぐく甘えてしまうヨティ。

だけど結局、あなたの言うことに、こっぴどく頷くだけのわたしになってしまった。

これからはこのひとにだけわがままを言おう、

このひとにだけ素直になろう。

そう思った。





あなたにさえ好きって言ったこともないのに、
友だちにはみんなばれていたね。

二人きりで出かけたことはないけど、
話した数は誰よりも多かったように思う。

やっと向き合えたね。

これからわたしたちはどうなっていくのだろうか。



まだ肌寒いのに半そでなんて着てくるから、

照れくさくて、あなたのことをまっすぐ見れない。

足元ばかり見ている

『見つけたよ』なんて小さな花びらを探し、

あなたの指に触れる機会を探している。

半そででは、反則だ。

デートの直前までは

この前の電話がそっけなかった事とか、
他の女の子と楽しそうに話してるのを見ちゃった事とか、
文句も言うつもりだったのに、

会ってしまつと 『会えてうれしい』

なんてことしか言えない自分がきらい。

でもね、本当に会えてうれしいの。





くるぶしにからむ春の海の波はすこしつめたいね。
精一杯の背伸びをしてくちびるに触れたわたしの勇気を、
ずっと忘れずにいて。

友達のふりを抜け出せたのは、


あなたが手を引いてくれたから。

どしゃぶりの雨の中、

子どもみたいに飛んだり跳ねたりしたね。

ねえ、水しぶきにかくれてキスをしよう。





髪についた花びらをとってくれたから、

本当は知らんぷりして、そのままにしておきたかったけど、

わたしもあなたの髪の花びらをとってあげた。

『おそろいだったんだ』ってあなたが笑うから、

『おそろいだったんだよ』ってわたしも笑った。

抱きしめた胸が、痛かった。

『ずっと』って指切りしたけど、

その『ずっと』がいつまでの『ずっと』なのか、

確認するのはすこしこわかった。



もう迷わない

わたしにはあなたが必要で

あなたにはわたしが必要だって

お互いかけがえのないものだって

やっとわかったから

一番想っていることは、
一番口にははいけないことのような気がして、

二人とも、慎重に言葉を選んだ。

だけどふたり同じ気持ちだったね。

違う世界に生きていても、

別々の道を歩んでいても、

今のこの気持ちをずっと大切にしていきたい。



ずっとずっとずっとずっと会いたくて、
やっと会ったことのできた今日。

このままふたり、星の迷路に迷ってしまおう。

わたしたちの指さきがふれあったとき、
周り中の星がいっせいにふるえた。

どんなにわがままを尽くしても、
抱きしめられれば 目を閉じることもできないう。



冷たい水

さとうはな詩集

2011年11月発行

ツイッターアカウント @s_hana111

写真素材

mizutama

<http://sora.saiin.net/>

フォトライブラリー <http://www.photolibrary.jp/>